



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	終章 調査報告のまとめ
Author(s)	小内, 透
Citation	北海道アイヌ民族生活実態調査報告 : Ainu Report, 3, 141-143
Issue Date	2014-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/59136
Type	departmental bulletin paper
File Information	AINUrep03_8.pdf



終章 調査報告のまとめ

小内 透

北海道大学大学院教育学研究院教授
北海道大学アイヌ・先住民研究センター兼務教員

本報告書では、アイヌの人々の生活と意識の多様性に関して、2008（平成20）年に実施したサーベイ調査の結果にもとづいて検討してきた。具体的には、アイヌの人々の生活や意識として、経済生活、アイヌ文化の経験、エスニック・アイデンティティ、不公平感およびアイヌ政策への評価を取り上げ、それぞれの多様性とそれが生まれる原因や背景をデータの統計的な分析を通じて探求した。

まず、第1章において、アイヌとしての純血性＝血の濃さと血筋を考慮した婚姻関係から混血化の実相と趨勢について検討した。その結果、一方で和人との結婚や和人養子の存在によって純血性が歴史的に低下していること、他方で純血性と婚姻関係がともにアイヌ性を示す指標として有効性をもち、アイヌの人々の多様性を生み出す重要な基盤であることが示唆された。

しかし、純血性と婚姻関係は深く関連していることもあり、多重共線性を生み出しやすく、この2つの変数を用いて分析するには工夫が必要であった。純血性と婚姻関係の2つの変数の使い方は、①純血性だけ使用する、②婚姻関係だけ使用する、③2つの変数を同時に使用する、④2つの変数を組み合わせた合成変数を使用する、という考え方が成り立つ。もちろん、いずれの方法にも長所と短所がある。①や②の方法を用いれば、比較的簡単に分析ができるが、純血性と婚姻関係の関連が無視されるので厳密性に欠ける。③のやり方であれば、より厳密な分析になるが多重共線性の問題が生じ実際に統計作業がうまくいかないことが多い。④が最も望ましいものの、複雑になりすぎて分析結果の説明が難しくなりやすい。

そのため、今回の分析では、第2章以降で従属変数として扱う経済生活、アイヌ文化の経験などの項目に関して、それぞれ様々な方法を検討した上で、多様性を生み出すメカニズムが説明しやすい方法を採用することとした。第2章～第5章で分析の方法が必ずしも同一でないのはそのためである。各章の分量に違いがあり、とくに第3章と第4章でその量が多くなっているのは、様々な方法で試行錯誤しながら探索的な分析を行ったことにもとづいている。

このように、今回のサーベイ調査結果の再分析にあたって、分析上の困難があった。そのため、アイヌの人々の多様性を生み出すメカニズムを十分に明らかにしきれたとはいえない。

それでも、重要な知見として取り上げるべきものが見出されたのも事実である。それらをまとめると、以下ようになる。

第1に、第2章～第5章の分析を通して、血の濃さを示す純血性や血筋を考慮した婚姻関係が、アイヌの人々の生活や意識として取り上げられた項目のほとんどに関して、多様性を生み出す基盤になっていたことが確認できた。

すでに述べたように、純血性と婚姻関係を別々に年収（第2章）やアイヌ文化の経験（第3章）などの個別の項目との関連を検討したり、純血性と婚姻関係を組み合わせて作成した合成変数（第

2章～第4章)を用いて分析を行ったりした。項目によっては、婚姻関係だけをアイヌ性の指標として用いた場合もある(第5章)。にもかかわらず、いずれの分析方法を用いても、アイヌ性を示す純血性や婚姻関係、また両者の合成変数がほとんどの項目で多様性を生み出す要因になっていた。

事実、第2章では、アイヌ性が強ければ強いほど、貧困リスクが高いことが明確にされ、第3章では、アイヌ性の強さとアイヌ文化の経験に大きな関連性が見られた。第4章では、アイヌ性が強ければ、アイヌ・アイデンティティも強固となることが明らかになり、第5章では、アイヌ性が強い者の場合、人種・民族や家柄による不公平感が強くなるという特徴が浮き彫りになった。

アイヌ性に関する変数の使い方が必ずしも同一ではないにもかかわらず、ある程度共通した結果が示されたことは、経済生活を始めたとした各項目に関して、それぞれの多様性を生み出すメカニズムが異なることを物語っているのかもしれない。この点は、今後、さらに深く検討していく必要があろう。

第2に、婚姻関係の場合、さらにジェンダーと組み合わせて検討することによって、浮き彫りになる傾向もあった。とくにアイヌと和人配偶者の婚姻関係の場合、どちらが男性であるか女性であるかによって、異なる特徴が見出されることが多かった。

たとえば、第2章で明らかにされたように、世帯年収に関して、アイヌの男性は結婚相手がアイヌであるかどうかによる影響があまり大きくない。これに対し、アイヌの女性は和人世帯主と結婚するケース以外は、世帯年収が平均より低くなるリスクがあった。「和人妻を持つアイヌ夫」や「アイヌ妻(夫)を持つアイヌ夫(妻)」ではなく、「和人夫を持つアイヌ妻」だけが、貧困のリスクを低下させる可能性が相対的に高いということである。和人との婚姻といっても、配偶者の性別によって経済生活に与える影響は異なると考えられる。

この結果は、第4章における分析の結果とも相即している。「和人夫を持つアイヌ妻」はアイヌ・アイデンティティが否定的になりやすいのに対し、「アイヌ妻(夫)を持つアイヌ夫(妻)」「和人妻を持つアイヌ夫」は否定的な意識を持ちにくい傾向が見られた。和人と結婚するアイヌ女性にのみ、アイヌ・アイデンティティに否定的な者が多くなりやすかったのである。

これらの知見から、一方で、アイヌの男性の場合、婚姻の相手がアイヌか和人かの違いはあまり大きな影響を与えず、他方で、アイヌの女性の場合、婚姻の相手がアイヌか和人かによって生活や意識に少なからぬ違いがもたらされることが浮き彫りになる。いいかえれば、和人夫を持つアイヌ妻はアイヌ社会から遠ざかり、アイヌ夫を持つ和人妻はアイヌ社会に近づいていくことを示していると考えてもよい。

第3に、アイヌ性以外の一般的な差異化の原理となる様々な指標のうち、15歳時あるいは現在の暮らし向きなどの経済的状況が、取り上げられた項目の多くでアイヌの生活や意識の多様性を生み出すことが明らかになった。

実際、15歳時の暮らし向きや現在の暮らし向きは、アイヌ文化の経験に影響を与えていた。15歳時の暮らし向きが良かった者、また現在の暮らしが豊かな者は、アイヌ文化の経験が少なかった(第3章)。15歳時の暮らし向きは、アイヌ・アイデンティティにも影響を与えており、当時の暮らし向きが良かった者は、「脱アイヌ」の意識を持ちやすかった(第4章)。

人種・民族による不公平感に対しても、経済的な状況が影響をもたらししていた。非正規雇用の

場合、人種・民族による不公平感が強い一方、現在の暮らし向きが良いほど、人種・民族による不公平感は弱かった（第5章）。社会で成功する要因に関する認識にも経済的な状況による差異が見出せ、個人年収が高ければ高いほど、また現在の暮らしぶりが豊かであればあるほど、社会で成功する要因として努力を支持する者が多かった（第5章）。

これらの傾向は、全体としてみれば、経済的状況が安定すると、アイヌとしての意識や行動が弱くなりがちであることを物語っている。

第4に、一般的な差異化の原理の1つである学歴が、アイヌの人々が構成する社会では異なる機能を持っていることが大きな特徴として浮かび上がった。

それは、アイヌの人々の場合、青年層や壮年層で学歴が個人年収の規定要因になっていない点に象徴的に示されていた。一般的には、現在でも学歴社会の原理が基本的に維持されているため、学歴と個人収入の相関性は高くなっている。しかし、分析の対象となったデータでは、学歴と個人収入の相関性が弱かった（第2章）。それどころか、青年層の場合、大学を始めとする高等教育の卒業者の方がそれより低い学歴の人々よりも個人年収が低い結果になっていた。それは、アイヌの人々の場合、学歴の獲得が経済的効果に必ずしも直結しないことを意味している。より慎重な深い分析が必要になるが、その背後には差別の問題があるのかもしれない。

だがその一方で、アイヌの人々は、日本社会における全般的な傾向と異なり、学歴を社会で成功する要因として重視する者が多かった（第5章）。日本社会では、学歴社会の現実にもかかわらず、学歴を重視する傾向は一般的に弱い。これと対照的に、アイヌの人々は現在もなお平均的な日本人と比べ学歴達成が低い状況に置かれているため、経済的社会的地位の上昇を図るための手段として学歴が重視されているのだと思われる。

このように、学歴の現実的な経済的効果と学歴に対する意識の両面で、一般的な傾向とは異なる特徴が見出せた。そこで明らかになった特徴は、多くのアイヌの人々が高い学歴達成を重視するにもかかわらず、高い学歴達成のみでアイヌの人々の経済的社会的地位を上昇させるのは困難であることを示唆している。

以上、アイヌの人々の生活と意識の多様性は、アイヌ性の強さによって生み出されると同時に、一般的な差異化の原理によってもたらされることが明らかになった。しかも、後者の中には、学歴のように、一般的な機能とは異なる効果をもたらすものもあった。これらが絡み合いながら、アイヌの人々が構成する社会が、その内部に多様性を抱えると同時に、一般的な傾向とは異なる特徴を持つことになっているのではないと思われる。

ただし、今回の報告書では、十分に検討できなかった点もある。アイヌの人々の生活と意識として取り上げられた項目間の関連が分析されずに残された。たしかに、アイヌ文化の経験とアイヌ・アイデンティティのあり方のように、両者が関連していたことについてある程度検討できたものもある。しかし、それ以外の項目相互の関係は検討できなかったことは事実である。共通したアイヌ性の指標にもとづく一貫した分析とあわせて、この点を今後の課題としたい。

以上、これらの諸点を確認し、本報告のまとめとする。

（小内 透）